

主 題：主よ、これが私の感謝です

聖書箇所：ピリピ人への手紙 1章20, 21節

神からすばらしい祝福を頂いたことに気付いた者たちは、その感謝をどのように現わそうかと考えます。これまで私たちはコリント人への手紙から、神がクリスチャンである私たちに与えてくださったすばらしい祝福を見て来ました。私たちはその祝福を覚えるなら、当然、どのように神に感謝を現わしていこうかと考えるはずですから、皆さんはそのことを考えておられることと思います。今日は、パウロが彼自身がどのように感謝を現わして生きて来たのかを私たちに教えているそのことをごいっしょに見ていきたいと思ひます。パウロ自身がどのように彼の神に対して感謝を現わしていったのか？

このピリピ人への手紙1章21節は皆さんよくご存じです。「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」とパウロが記しています。まさに、彼自身の人生について語ったと言っても過言ではない箇所です。パウロは何を語っているのでしょうか？どういう意味でしょうか？ひと言で言えば、「キリストが私にとってすべてだ」と言っているのです。「何物よりも、自分よりも、私は主を愛している」と言っているのです。思い出しませんか？最も大切な戒めは何かという問いかけに対して主がお答えなりました。もちろん、旧約聖書の中にもそのみことばが記されています。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。」（申命記6：5）、「そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』（マタイ22：37）と。あなたの内なるすべてをもって、あなた自身のすべてをもって、この偉大な神を愛しなさいということです。ですから、神からすばらしい祝福を頂いたことを感謝していたパウロはこの神を心から愛したのです。主が望んでいるように、命じているように、彼の内なるすべてをもって、彼のすべてをもってこの神を愛したのです。そして、そのことをパウロはここで「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」と言ひ表わしたのです。

この21節のみことばを見ると、まさに、「キリスト」ということばにパウロの人生そのものの集約を見ることが出来ます。あたかもパウロは「キリストのために私は生きているのです。キリストこそが私にとっての人生なのです。」と言っているようです。よくこのようなインタビューを耳にします。何かの快挙や偉業を成した人に記者が尋ねるのです。「あなたにとって〇〇は何ですか？」と。例えば、野球だったら「あなたにとって野球とは何ですか？」と。その答えは大概「人生そのものです。」「私にとってのいちです。」と、それによく似た答えを聞きます。私の知っているある選手から聞いたのは、「プレーヤーは一日中野球のことばかり考えている。寝ても覚めても…。」と。パウロは「私は寝ても覚めてもイエス・キリストのことを考えている。主イエス・キリストこそが私のいちであり、私の人生そのものなのだ。」と言うのです。パウロにとって「生きることはキリスト」、キリストがパウロにとっての生きる目的であり、彼の動機であり喜びであり彼の夢だったのです。パウロはこの主に喜んで頂くことだけを考えて生きていたのです。それがパウロでした。神から祝福を頂いたことを本当に心から感謝していたパウロは、そのように生きたのです。まさに、それこそ感謝の生き方だと言うことが出来ます。

パウロはⅡコリント5：15で「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」と言ひています。ここでも私たちに教えているように、イエスがなぜあなたのために十字架で身代わりに死んでくださったのか？それはその贖いによって救い出されたあなたがこの主のために生きるためであると言うのです。これまでは自分のために生きていました。自分を喜ばせようと思ったし、自分の願いや夢を叶えようと自分のために一生懸命生きていた、その自分は死んだのです。そして、本来の目的に沿って、私たちの造り主である神を喜ばせることを目標に生きる人生が始まったのです。それがパウロの生き様でした。彼は感謝をもって日々を過ごしていました。

☆感謝の人生の目標

この20節のみことばをご覧ください。今、私は新改訳聖書の第二版を使っています。「それは、私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。」、ところが、第三版では訳がかなり違うので驚かれると思います。「それは私の切なる祈りと願いにかなっています。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも

死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。」となっています。

パウロはここで「私の切なる願いと望みにかなっているのです。」と言って二つのことばを使っています。「切なる願い」と「望み」という二つの名詞が出て来ます。「切なる願い」とは「首を伸ばして待ち望む、待ちきれない思いで待ち望んでいる、今か今かと待ち望んでいる」という様子を表わすことばです。そして、「望み」ということばは「期待、希望」と訳せることばです。この文章を見たと、パウロは二つのことを言っているのではなく、一つのことを教えようとしています。つまり、パウロ自身の心からの熱い願い、彼が熱望していたことが何かということをご自分で教えようとしているのです。それはいったい何でしょう？

◎パウロが強く願ったこと

A. キリストのすばらしさを証すること

20節に「私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める」とあります。「これが私の強い願いだ。このことを願いながら生きている。」と言うのです。キリストのすばらしさ、また、この救いのすばらしさを人々の前で明らかにするためにです。確かに、今、新改訳第二版を読みましたが、第三版では「キリストがあがめられることです。」と記されています。実は、このことばは「大きくする、はっきり目に見えるようにさせる」という意味を持っています。どちらかと言うと第二版の方が原語に近いように思います。いずれにしろ、ここでパウロが言わんとしていることを皆さんに汲み取っていただきたいのです。パウロが強く願っていたことは、彼は人々の前で「キリストのすばらしさ」をはっきりと見せたいということです。主イエス・キリストがどんなにすばらしいのか、この救いがどんなにすばらしいのか、それを人々の前でより大きくして、よりはっきり彼らの目に見えるようにしたい。このことを彼は望んで日々を過ごしていたのです。

どうですか？皆さん。救われたことを感謝していたパウロは、この救ってくださった神のすばらしさを、この救いのすばらしさをより多くの人々の前にはっきりと見えるように示したいと願っていたのです。皆さん、そのように願って今日生きていますか？そのように願って日々を過ごしていますか？元、ムーディ教会のウォーレン・ウァズビーはこのように言っています。「望遠鏡は遠くのを近くに見せる。顕微鏡は小さなものを大きく見せる。未信者にとってイエスは大切な存在ではない。未信者にとっては他の人物が、また、他の物がより重要である。しかし、未信者が危機的状況を通っているクリスチャンを見る時に、彼はイエス・キリストがいかに偉大なお方であるかを知ることができる。信者のからだは小さなキリストを大きく見せるレンズであり、遠くのキリストを近くに見せることである。」と。パウロが何を望んでいたのかがよく分かります。まさに、自分はレンズのような存在だ。この主のすばらしさを拡大して人々の前でより鮮明に見せること、それが私の人生の目的であると言うのです。

皆さん、私たちの周りの人たちはこのキリストのすばらしさを知らないのです。この方がどんなに偉大なお方であるのかを知りません。しかも、この方が与えてくださる祝福がどんなにすばらしいのか、そのことも知りません。だから、あなたには、そのことを人々に知らしめるという責任があるのです。彼らが知らないことをあなたが知っているからです。彼らが経験したことのないことをあなたが経験しているからです。パウロはこの救いに与って以来、自分のすばらしさを人々に知らしめるために生きる生き方を止めました。彼はキリストのすばらしさを知らしめるために生き始めたのです。彼は自分自身や自分の功績を人々に自慢するために生きる生き方を止めたのです。彼にとってキリストが自慢となったのです。パウロは自分の夢を果たすために生きることを止めました。却って、キリストのために生きる人生を歩み始めたのです。彼は自分を満足させるために生きるのを止めました。却って、キリストに喜んで頂く人生を歩み始めたのです。なぜなら、喜びも感謝も満足も、それは結果として神があなたにくださるものだからです。そのことはまた後で触れます。ですから、このようにパウロは救われた者として主の前を正しく生きました。まさに、この生き方は救われた者の主に対する当然の応答です。救われたことを感謝している人は当然そのように生きていきます。そのことをここで見ることができます。

21節でパウロは「死ぬこともまた益です。」と言いました。なぜ、死ぬことが益なのか？三つのことが言えます。

a) 主イエス・キリストにお会いできる：一つは、私たちクリスチャンはみなこのすばらしい主イエス・キリストにお会いする日を待っているということです。その日を我々は待ち望んでいます。「イエス様にお会いできる」と。主ご自身が備えてくださった天国の住まいに私たちを迎えてくださると主ご自身が約束してくださった。イエス・キリストを信じる者たちは、何千年に渡ってそのことを信じて、その希望を持って生きています。なぜなら、これは神ご自身の約束だからです。しかし、パウロはそのことだけを考えていたのでしょうか？

b) 罪からの解放：二つ目に、主を悲しませる罪からの解放ということも考えていたでしょう。なぜなら、今見て来たように、パウロはどのようにして主を喜ばせることができるのかを考えていたからです。そして、彼は主のみこころに従い続けたのです。彼の関心は主を喜ばせることでした。いつもその願いを持っていながら、現実の問題は、神を喜ばせることではなくて悲しませることを行なっているということです。「なぜ、こんなことばかり繰り返すのだろう…」と、パウロもその葛藤を経験しています。ローマ書7章で告白しているように…。ですから、パウロの願いは、早くこの罪のからだから解放されることでした。そのことを考えたパウロにとっては「死ぬことも益である」、死を迎えることによってもう主を悲しませることがなくなるからと、そのように考えたパウロだから、当然、そのことを「死ぬこともまた益です。」と表現するはずで、自分のことなど考えていない、神を喜ばせることを考えていたのです。

c) 主の栄光が現われるから：もう一つは、その時に主の栄光が現わされると言います。パウロは知っているのです。こうして生きていることもすべて神のみこころの内にあることを。この地上での働きが終わると神は私たちを神のもとに召してくださる。それもすべて神のみこころに沿ってです。パウロが知っていたことは、主のみこころが為される時に必ず主の栄光が現わされることです。ですから、彼にとって死というのは「神さま、何とか先に延ばしてください」ではなくて、「どうぞ、みこころを為してください。私が生きているときもあなたの栄光を現わしたい。私の死をもってあなたの栄光を現わしたい。」と。そのようなことを願っていたから、パウロはこのように告白したのでしょう。

まず、私たちはこのみことばを通して、パウロ自身がキリストのそのすばらしさを証するという、そのメッセージを見て来ました。

B. キリストのすばらしさを証する生き方

次に見るのは、キリストのすばらしさを証する生き方そのものです。キリストの偉大さを人々の前にどのように明らかにしていくのかその方法です。実は、パウロはそのことを20節で教えているからです。彼は「ことばによる方法」と実際の生き方「行ないによる」方法を挙げています。

1. ことばによって

三つのことが記されています。20節「それは、私がどういうばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って」と、「恥じることなく」「いつものように」「大胆に」と言っています。パウロはことばによってキリストのすばらしさを人々に伝えようとしていました。彼はことばによってキリストの福音を語ろうとしていました。ご存じのように、この福音、救いのメッセージはあなたがことばをもって語らなければ、人々はそれを知ることはありません。だれかがあなたにことばをもって語ってくれたように、私たちもことばをもってそのことを語らなければいけないのです。

1) 恥じることなく

パウロはこの福音のメッセージを語ることにに関して「私はそのことを恥とっていない」と言います。

(1) パウロは福音のメッセージを恥とはしていなかった

ローマ1:16で「私は福音を恥とは思いません。」と言っています。なぜ、パウロはこの福音のメッセージを恥と思わなかったのか？彼は続いて言います。「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と、彼は知っていたのです。この福音のメッセージこそが、罪人をその罪から救い出すメッセージだ。この福音のメッセージだけが人間に希望をもたらすのだ。この福音のメッセージだけが神が人間に与えられたメッセージだと。ですから、彼はこの福音のメッセージを恥とは思っていなかったのです。

(2) キリストを恥じていない

キリストを愛し心から敬っていたパウロはキリストのことを恥じてはいなかったのです。ガラテヤ6:14に「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」とあります。パウロにとって十字架が彼の誇りだったのです。その十字架を見上げる時に、そこに愛する主イエス・キリストが架かっている。その十字架を彼がいつも覚えるたびに、彼自身は間違いなく心からこの主に感謝をしたでしょう。どうですか皆さん？あなたを造ってくださった神が人としてこの世に来てくださり、あなたのすべての罪を負って十字架で死んでくださらなければ、あなたにも私にも罪の赦しはなかったのです。ここまで神はあなたを愛して、あなたにこのようなすばらしい救いを備えてくださった。パウロはメッセージだけでなく、キリストを恥じてはいませんでした。キリストを誇っていました。

(3) 自分の身に起こるいかなることも恥じていない

信仰者として神に従っていくといろいろな困難があります。普通にはこのように言うでしょう。「こんなにしんどいのなら、こんなに辛いのなら…」と。パウロはそうのように思っていなかった。パウロは喜んでこのキリストの福音を宣べ伝え続けました。そして、実際に彼は投獄されていたのです。なぜですか？福音を語ったからです。ですから、福音を語ることによって彼が経験する様々な困難や苦しみ、迫害に対して、彼は不満や愚痴を言っていない。むしろ、彼は喜んでいます。なぜなら、彼は主のことばを思い出すからです。「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。」（ヨハネ 15：20）。パウロ自身もこのように言っています。Ⅱテモテ 3：12「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」と。

そして、パウロが主イエス・キリストを見た時に、神であるお方が罪人から辱めを受けたのです。神である方が罪人から苦しみを受けたのです。救うために来てくださった神に対して罪人が為したことは、彼を受け入れることなく彼を十字架に送ることでした。主ご自身がそうだったから、パウロ自身もどんな迫害や困難があったとしても、彼はそれを恥じることなく主に従順に従い続けました。このように言っています。Ⅱテモテ 1：8「ですから、あなたは、私たちの主をあかしすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません。むしろ、神の力によって、福音のために私と苦しみをとみにしてください。」と。

「主をあかしすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません。」と、それは恥じるのではなく喜ぶことであり感謝することだからです。パウロは主を恥じてはいませんでした。その福音のメッセージも、そして、彼が経験する様々な困難も恥じたり後悔などしていませんでした。

そして同時に、パウロは主の前に立つ時に、主ご自身が彼のことを恥じないということも知っていました。覚えていますか？マルコの福音書の中でイエスがこのように言われたことが書かれています。

8：38「このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」と。だから、パウロは神の前に立つときに、そのようなことは心配しなくてもいいと確信していたのです。なぜなら、パウロは主を誇っていたからです。このすばらしい救いのメッセージを誇っていました。正直言って、私たちは主のメッセージを語る時、福音を語る時は勇気が要ります。でも、私たちが覚えなければいけないこと、自分に問いかけなければいけないことは、私はこのすばらしい救いのメッセージを恥じていないかどうか、この主ご自身を恥じていないかどうかということです。

パウロは救われた者として、そのことを感謝する者として、心から主を愛したのです。主を誇っていたのです。

2) いつも

続けて、20節に「いつものように今も」とあります。パウロはキリストのすばらしさを一人でも多くの人に知ってもらいたいと思っていました。そこで彼はこのすばらしい救いを、また、救い主を「いつも」語り続けたと言っているのです。機会あるごとに彼はそのメッセージを語ったのです。皆さんもそのような機会を探りながら福音宣教をされていますか？今日だれかに会うかもしれない、だれかにこのキリストのすばらしさを語るができるかもしれないと、そう思ってもなかなか実践することは難しいですね。どうですか？たとえば、トラクトをポケットに忍ばせておいて、機会がある度にそれをだれかにお配りするなどというのは…。

今でも思い出すのですが、私のクラスメートの一人がそのような生活をしていたことを…。かなり昔のこと、多分、1977年頃のことです。朝のチャペルの時間がありました。いつもと様子が違うと思いました。前の方でリーダーたちが何か話し合っているからです。暫くしてアナウンスがありました。私たちのクラスメートの一人が飛行機事故で今日亡くなったということでした。その学校にはパイロットを養成する科があったのです。それは宣教師としていろんな道路もないような秘境に飛行機で行って、物資を落としたりする、そのような宣教師のパイロットを訓練するという科でした。この朝、そのクラスメートはいつものように訓練を受けるために旅立とうとしたときに、何かのエンジントラブルがあってその飛行機は墜落して、彼は天に召されました。その話を聞いたときに、すぐにその人物の顔は浮かびませんでした。でも、いろんな話を聞いているときに、こんな話をしてくれたことを今でも忘れることができません。彼はいつも自分の胸のポケットにトラクトを入れていたと。亡くなるその朝も同じようにそこにトラクトを入れていて、だれかにトラクトを配ろうという思いを持って飛行機に乗ったのです。主は彼を召されました。しかし、恐らく、彼はそのようにしてどんな時にでも、そして、一人でも多くの人にこのすばらしい主を知ってもらいたいという願いを持ってその働きをしていたのでしょう。

問題は、私たちがそのような働きをしているかどうかです。パウロもそうだったのです。なぜですか？感謝していたからです。救われていたことを感謝していたからです。

3) 大胆に

これは「大きな声で」とか「力強く語る」ということではありません。使徒の働きの中で、初代教会の様子を思い浮かべるとそのことが分かると思います。初代教会のクリスチャンたちはいろいろな迫害を経験しました。その時に彼らはこのような祈りを主の前にささげています。使徒4：29、31「：29主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。」、彼らが願ったことは何だったのか？いろいろなところからの迫害を経験し、様々な苦しみ迫害を経験するのです。脅かしを経験したときに彼らがしたことは「神さま、ここから解放してください」ではなくて、「このような中にあっても大胆にあなたのすばらしい救いを語らせてください」でした。その後、「：31彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。」と。主は祈りに答えてくださったのです。神の助けによって神の力によって、彼らはこの神のすばらしいメッセージを語ったのです。

* どの時代であっても、私たちにはこの聖霊の助け、力が常に必要

思い出しませんか？使徒の働き1章の中で主イエスが言われました。1：8「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」と。パウロ自身もIコリント2：4で「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現れでした。」と言っています。彼は人間的な知恵を用いて人々を論破したのではなく、神の力によってキリストの福音を語ったと言うのです。神に働いて頂こうとするならば神の助けが必要です。自己満足を得るためなら自分の考える方法でやればいいのです。でも、悲しいことにそれは神ご自身がお喜びにならない。この初代教会のクリスチャンたちを見ても言えることは、彼らは主の力に依存して、主の力に頼って、主の働きをしたということです。パウロが言うように「大胆に語り続けていきたい」、その背後には、その大胆さその力を与えてくださる神に頼って語ると言うことです。

私たちにもそれが必要です。皆さんもいろんな時に主イエスの福音を語っている時に、人間に頼っていませんか？頼らなければいけないのは、心を開き救いをもたらしてくれる神にです。あなたや私がすることはこの神が言われているメッセージを忠実に伝えることです。そして、そのメッセージを主が用いてくださって、聖霊なる神がそれぞれの心の中に働き、罪を示し、救いへと導いてくださるのです。人間のわざではないのです。神のわざなのです。だから、パウロ自身が求めたことは、「どんな状況にあっても私はこのキリストのすばらしさを人々に宣べ伝えていくために、知らせるために、神さま、あなたの力が必要です。」です。だから、パウロは用いられているのです。ことばによって、このキリストのすばらしさを人々の前で明らかにしていきたいと。

2. 行ないによって

当然、パウロは行ないによってキリストを証することを望みました。20節に「私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める」と書いてあります。

1) 私の身によって

彼は自分の日々の生活を通して、日々の歩みを通して、この主のすばらしさを人々に知らしめていきたいと願っていたのです。間違いなく、人々はパウロの中にイエス・キリストを見ました。皆さんもそのように歩んでおられますか？私たちは主から多くの祝福を頂いたと学んで来ました。私たちは主ご自身の喜びを頂きました。主ご自身の平安を頂きました。私たちはどんな時にも感謝することのできる者へと生まれ変わりました。私たちは神から本当の満足を頂きました。私たちは希望を持って生きることが出来る者へと生まれ変わりました。皆さん、このような祝福を頂いたということはもう何度も見て来ているのです。問題は、そのことを皆さんが人々の前で明らかにしているかどうかです。主が与えてくださった喜びはどのような時でも喜べる喜びでしょう？その喜びをもって日々過ごしていますか？どんな時でも喜べる喜びを頂いた者、それがクリスチャンです。問題は、そのような喜びを頂いた者として喜びを持って生きているかどうかです。どのような時でも心を満たす平安を頂いたのです。どんな時でも私たちの心は平安で満たされ続けていくのです。これがクリスチャンに与えられた主からの祝福です。問題はそのように生きているかどうかです。心がいつも騒いでいませんか？周りの人たちがあなたを見た時に「この人には平安がないな」と思っていないですか？

どのような時にも心から溢れる感謝を神はくださったのです。周りの皆さんはそれを見えていますか？それとも感謝ではなくて不平や不満ばかりが口から出て来ていませんか？ どのような時にも心が満ち

足りているのです。本当の満足は主は与えてくださったのです。心から満たされている人たちは、いつも喜んでいます。感謝しています。神が満足をくださったからです。物があるからとかなないからではないのです。神の満足を頂いたのです。どのような時にも揺るがない希望を頂いた。希望を持って生きていますか？イエスにお会いするのだ、イエスと永遠を過ごすのだと、約束されたすばらしいその希望を持って生きていますか？

信仰者の皆さん、是非聞いてください。あなたの周りの人々はあなたが頂いたと言っている祝福が本物かどうかを見ているのです。あなたに祝福を与えてくださった主が本物かどうかを見ているのです。だから、いま見て来たような幾つかの祝福があなたの心を支配して、それにあなたが満たされて「私はこんな祝福を頂きました」ということを行ないをもつて示していくためには、また、このようなすばらしい主がいてくださるのだということを行ないをもつて示していくためには、あなた自身が神のみことばに従わなければならないということです。そして、聖霊なる神の助けを頂きながら主に従い続けていくのです。繰り返しますが、それ以外の方法はないのです。旧約の時代から信仰の勇者たちに共通したその特徴を見てください。彼らは神のおっしゃることを信じ、その教えに従ったのです。だから、神は彼らを祝されたのです。

彼らは自分が納得するとかしないに関係なく、神が言われたことに「私は従います」と言って従ったから、神は彼らを祝し彼らを用いられたのです。皆さん、「ただみことばを聞くだけの者」になっていませんか？神の関心はどれだけのことを知って、どれだけのことを蓄えているかではないのです。どのように今日生きているかなのです。神がくださった喜びを持って生きているかどうかです。あなたの心が感謝に溢れているかどうかです。あなたの心の中に神が約束された平安があるかどうかです。あなたの心が満ち足りているかどうかです。希望を持って生きているかどうかです。みなはあなたがどのように生きているのか、それを見ているのです。なぜなら、みな知りたいのです。あなたが言っているこの神が本物かどうか。あなたが言っているこの幸せが本物かどうか。ですから、もしそうでなかったら、あなたの歩みをもう一度吟味してください。どこかに罪がないですか？神にすべてを明け渡していると言いながら明け渡していない部分がどこかにないですか？あなたを変えてくださるのは神のわざです。そして神は、神のおことばである聖書と聖霊なる神をもってあなたを変えていかれるのです。神の与えてくださったその教えに沿ってあなたが生きているかどうか？です。

今朝、ヨシュア記を読んでいると面白い部分がありました。ヨシュアはヨルダン川を渡って約束の地に入って来ました。ご存じのように、彼らが入って来て最初に敵に対して敗北したのは、アイという所でした。なぜなら、イスラエルの中に罪があったからです。そして、神がその罪を赦して下さってアイを滅ぼします。滅ぼされた後、ヨシュアが民に対してもう一度モーセが語った神からのメッセージを伝えるのです。なぜですか？神が何を望んでおられるのかをいつも覚えることが必要だからです。なぜなら、神の教えてくださることに従うことによって、神はあなたを祝してあなたを用いるからです。非常に単純です。その教えは旧約聖書も新約聖書も変わっていないのです。神があなたに望むことは「わたしの教えに従え。わたしは主だ、神だ。あなたはその奴隷だ。」です。その時に神があなたを変えていかれるのです。いや、神があなたを用いていかれるのです。

パウロはこのすばらしい主をより大きく人々の前で見せたい、よりはっきり見せたいと願っていました。この20節のみことばをもう一度見ると「キリストのすばらしさが現わされること」と書かれています。この「現わされる」という動詞は受け身です。どういう意味か？今から言います。パウロはここで自分の歩みに関して「私は神に喜ばれることを一生懸命努力して頑張っていきましょう。」と言っているではありません。また、そのようにあなたに勧めているのでもありません。そのことを彼は願っていました。神のすばらしさを世に証していきたい。イエス・キリストのすばらしさをより多くの人に見てもらいたい、知ってもらいたいと願っていました。

しかし同時に、その働きは神の働きだということを知っているのです。だから、パウロが望んだことは、その働きのために「主よ、どうぞ私を用いてください。」ということです。そのように祈っているのです。キリストのすばらしさがあなたを通して現わされるのです。その働きを為さるのが神なのです。ですから、パウロはそのことを望んだのです。そして、そのことがこの20節に記されているのです。

今日見て来たみことばのまとめです。パウロはこう言います。「私にとってキリストがすべてである。何ものよりも、そして、自分自身よりも私は主を愛している。なぜなら、こんなにすばらしい祝福をくださったから、こんな私を罪から救ってくださったから。」と。だから、彼はこのことを願ったのです。「私を通してこの偉大な神のすばらしさが人々の前で証されること」を。そのために彼は生きたのです。そして、この状況を思い出して頂きたいのは、何回か触れたように、パウロは投獄されていました。投

獄されていながら、彼はこの20節で言ったように、あることを強く望んでいたのです。首を長くしてあることを期待していたのです。それはキリストのすばらしさが証されることでした。ちょっと待ってください。パウロは投獄されて牢屋にいたのです。その状況にあっても彼が望んでいたことは、キリストのすばらしさが証されることだったのです。私たちは言います。「この問題から解放されたら、この困難から解放されたら…」と。パウロは違いました。彼は問題のそのただ中であって、キリストのすばらしさが自分を通して証されることを期待していたのです。主がすべてのことを支配しておられるからです。投獄されたことも偶然に起こったのではないのです。神のご計画のうちにあったのです。そのことを知っていたパウロは「主よ、どうぞこの機会に、あなたが与えてくださった機会をあなたがお用いになってあなたの計画を為してください。あなたのすばらしさを人々に知らせる機会として用いてください。」と言うのです。

なぜなら、主イエス・キリストはこんなことを言われたからです。世の終わりのことについて話された時に、ルカの福音書21:12-13「しかし、これらのすべてのことの前に、人々はあなたがたを捕らえて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出すでしょう。:13 それはあなたがたのあかしをする機会となります。」と。だから、パウロも知っているのです。

「どうしてこんな苦しみか…」とは言わなかったのです。実は、その苦しみも神がくださったものなら、それも神のすばらしさを証する機会であると。今、皆さんはいろんなところに置かれています。今日、悲しみの中でここに来られた方がいるかもしれません。痛みをもって来られた方がいるかもしれない。悩みがあるかもしれません。でも、神があなたに言われることは、今、あなたが置かれている状況を神はご存じで、その状況の中にあって、神はあなたを通して神ご自身のすばらしさを世に明らかにすることがお出来になるのです。そして、神はそのことをあなたを通して為そうと望んでおられるのです。

もし、あなたがそのことを望むなら、そのように神はあなたを用いてくださるのです。その時に、人々はあなたの神が真の神であることを知るのです。問題のない時に喜ぶことはだれにでもできることです。私たちが直面するいろんな困難の中にあって、あなたが主を見上げて主に従い続ける時に、主はあなたを通してそのようなみわざをなしてくださる。パウロはそのように生きていたのです。ですから、彼はどんな時でも大胆さを失いませんでした。どんな時にも忠実に歩むことを止めませんでした。どんな機会にも彼は「この機会は神が与えてくださった神ご自身のことを伝える機会である」と思ったのです。

***パウロは次のことを確信していました**

1. 神はすべてのことを働いて、私の益としてくださる

ローマ8:28に「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」とある通りです。

2. すべてのことに神の計画がある

3. すべての出来事は、主を信じて、主のすばらしさを証する、そのための機会である

パウロはこのように生きましたが、彼が実際にこのように生きることができた二つの秘訣を、パウロは記しています。

***このように生きるためには次の二つのことが必要**

実は、この1章19節にパウロはそのことを記しています。「というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。」と。

(1) 祈り＝パウロが生きたような生き方をあなた自身が実践するために必要なことの一つは「祈り」なのです。パウロのためにピリピ教会は祈っていました。もちろん、パウロもピリピ教会のために祈っていました。このように「祈り、祈られる」ということが私たちには必要なのです。願わくは、皆さんがこの礼拝が終わった後、どなたかと「この一週間、キリストのすばらしさを証する歩みをしていきたいからどうぞ私のために祈っていて。私もあなたのために祈るから。」と、そのような約束をしてそのように祈ってこの場を去って頂きたいと願います。パウロたちはそのようにして生きていたのです。互いのために祈り合っていたのです。励まし合っていたのです。なぜ、私たちがそれをしないのでしょうか？パウロでさえもそう言っています。祈られなければいけなかったのです。祈りの力が必要だったのです。私たちも必要でしょう？

(2) 聖霊の助け：私たちはどんな時でも聖霊なる神に助けを求めることができるし、求めていかないといけないのです。「どうぞ、私があなたのすばらしさを証する、そんな日々を過ごせるように助けてください。」と、そのようにしてパウロは生きたのです。

彼は明確にどのように生きていけばいいのかを教えてください。彼自身がどのように生きたのかを私

たちに教えてくれているからです。私たち信仰者は主の栄光を現わすために生きています。Ⅰコリント 6：20「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」と、「神の栄光を現しなさい」と、言い方を変えるなら、神のすばらしさを人々の前で明らかにしなさいと言っているのです。パウロはそうように生きたのです。なぜですか？感謝していたからです。パウロは救われたことを感謝していたのです。だから、彼はこの神のすばらしさを伝えるために生きようとしたのです。そのような思いをもって生きたのはパウロだけではありません。

今から150前のことですが、一人の人がある絵を見ました。イエス・キリストの十字架の絵でした。その絵の下にこう書いてあるのです。「わたしはこれをあなたのためにした。あなたはわたしのために何を為すか？」と。そのことばを読んで彼はその後ずっと考えていました。イエスが私のためにしてくれたことは明確です。十字架で死んでくださった、十字架で死んで私に救いを備えてくださった。では、私はこの方のために何をしているのだろうか？と。そこで彼は次のような詩を書きました。主イエス・キリストご自身が語っておられることをこのように綴ったのです。「わたしは（主のこと）あなたのためにわたしのいのちを与えた。わたしの尊い血潮を流した。それはあなたが解放され死から生き返るためであった。わたしは与えた。わたしはあなたにわたしのいのちを与えた。いったい、あなたはわたしに何を差し出すのか？わたしはあなたのために大変な苦しみを味わった。あなたの舌が語る以上のことを。苦しみの極みはあなたを地獄から救うためだった。わたしは耐えた。わたしはあなたのためにすべてのことを耐えた。いったい、あなたはわたしのために何を耐えるのか？わたしはあなたにもたらしした。天のわたしの住まいから完全で無償の救いを。わたしの赦しとわたしの愛をわたしは持って来た。わたしはあなたに高価な賜物をもって来た。あなたはわたしに何をもたらすのか？」と。有名な讃美歌332番「主はいのちを与えませり」です。

みな考えるのです。この犠牲を払ってくださった主に対して私は何をもって答えていこうかと。信仰者の皆さん、主のすばらしさを証するために生きるのです。このすばらしい主のすばらしさを明らかにするために生きるのです。そのためにあなたは救われたのです。あなたのすばらしさではありません。この方のすばらしさです。この救いのすばらしさを伝えるためにあなたは救われたのです。そのために生きることです。

《考えましょう》

1. 「生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」というパウロの告白をあなたのことばで説明してください。
2. あなたもパウロのように生きることができると思いますか？その理由を書いてください。
3. あなたがパウロのように生きるためには、どうすればいいのかを書いてください。
4. どうしてこのように生きる人に、喜びと祝福が与えられるのでしょうか？その理由を書いてください。